

平成25年4月27日

場所 愛媛大学教育学部附属教育実践総合センター

第3回学びのコミュニティ研究会記録鼎談

「子どもが育つ学級・学校づくりのキーワード」

鼎談者：八木良先生(中予教育事務所) 白松賢先生(愛媛大学) 小笠原陽二先生(道後小)

八木：学級の風土について

小笠原：教員が風となり、家庭のしつけや校風などが土となる。

風としての実践として、湯築小での「7つの夢」道後小での「3つの夢」などの児童会を中心とした活動がある。

八木：リーダーをいかに育てるか。学級がリーダーを育てるものである。

白松：日本は受けもち学年が毎年異なる。そのため強制的指導となり、カウンセリングは難しい。

八木：低学年、高学年を受けもつ先生は決まってくる。

小笠原：同じ学年をもつのがいいのか。様々な学年をもつのがいいのか。

白松：採用3年間は他の業種で仕事をする必要がある。担当の業種だけでなく、様々な子ども史を知ることが大切。

小笠原：親として学ぶこともあったり、特別支援学級でも学ぶこともある。

八木：幼稚園では年長児、小学校では6年生はしっかりするが、競争の在り方についてはどう思うか。

白松：教師が子どもをランク付けするのではなく、子ども間で競争することが大切。運動会などそこでき目立てない子もいる。

小笠原：リーダーを支える集団作りが大切である。音楽会でリーダーになる子、運動会でリーダーになる子を育てるとともに、その子についていく集団を育てていくことが必要。

八木：教師の関わりかたについて

白松：守ってもらえる安心感 活動した時に周囲の子にどれだけ目を配れるかが大切。

八木：鳥型いじめというものがあるが、自分より弱いものを見た時に安心する。

小笠原：トラブルがあったときこそ、子どもと教師が近づけるチャンスである。先生も困っていることを子どもに伝える。

八木：学級で困ったことはないか。マイナスのリーダーがいるときに困った。

白松：学級の2、3人が向こうを向いてしまうと困難。大人数の先生でサポートしたり、空気を見無視することが必要である。豊かな先生とは、失敗や不完全であることが前提である。

小笠原：例えば学級通信など親との関わり時間を増やすことが大切である。親と話すきっかけにもなる。

八木：学級作りのキーワードとは。

小笠原：うるさい学級。授業でエネルギーを使う。

白松：自尊心は3年生まではほめて高めることができる。

短所や失敗を認め合い、先生の失敗も認められるようになることが大切。

